

『伝える力』を育む授業の創造

～主体性を促す対話的な学習活動の工夫～

関原 寛明

小野真理子

野沢喜満子

1 主題設定の理由

◆英語教育の動向から

平成25年12月、文部科学省は、2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。そこには、グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として、小学校中学年はコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした活動型の外国語活動を、小学校高学年は初歩的な英語の運用能力を養う教科型の外国語教育を行い、また、中学校では授業を英語で行うことを基本とし、身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養うこと、高等学校では授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化させ、幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやり取りができる能力を養うことが示されている。小・中・高等学校を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養い、生徒の総合的な英語力向上を目指している。

それから後、第二期教育振興基本計画を踏まえ、文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」等を経て、平成27年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部会より「論点整理」が示された。そこでは、「言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、4技能を総合的に育成すること」をねらいとした現行学習指導要領の成果と課題が挙げられている。その後、外国語ワーキンググループにおける審議を経て、平成29年3月に新学習指導要領が公示された。中学校の新学習指導要領の外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次の通り育成することを目指す。(1)外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけるようにする。(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」と示されており、教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱における資質・能力を育成することと整理されている。また、指標形式の目標はCEFRの枠組みを参照し、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やりとり）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の5つの領域において示されている。また、それらを達成するために必要となる語彙数は、現行学習指導要領に示されている1200語から、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語と示されている。新学習指導要領の実施により、5つの領域をバランスよく指導し、外国語による総合的なコミュニケーション能力を養うことが求められるようになるだろう。ちなみに、現在の第二期教育振興基本計画に掲げられている生徒の英語力の成果指標は、中学校卒業段階でCEFRのA1レベル程度以上を達成した中学生の割合を50%とすることとされており、第3期教育振興基本計画においては、更なる改善・充実が図られることとなっている。以上の動向を踏まえてみるに、今後の中学校英語学習者には、ある程度の語彙力と表現力を持ち、自分の伝えたいことを積極的に相手と英語を使って相互理解を図る力が求められていることが

分かる。つまり、自己のメッセージや意図を相手に的確に「伝える」力を育み、しかも、それが他者との英語によるインタラクションを通じて達成されることが求められ、教師はそれを意図的に仕組んでいくべきであると考えられる。また、外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を身に付ける上で、言語活動に主体的に取り組むことが極めて重要な観点であるという旨が学習指導要領に明記されているように、単元や1単位時間に生徒の主体性を促す指導を計画していくことは、言語習得において、重要な部分を示していることは明白であると考えられる。

ここに本研究主題を決定する意味が存在すると思われるので、「伝える」と「主体性」及び「対話」を意識した「学習活動」を本研究主題のキーワードにした。

◆これまでの研究との関連から

H17～19 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、『伝える力』を生徒の実態に合わせて具体的に6つに分類して示し、それぞれの『伝える力』の向上を目指し、研究を行った。

H20～22 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

H20～22年度までの3年間は、それまで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し、効果的な授業のあり方や指導法を探った。『伝える力』をより豊かなものにするために、伝える表現を思考するためのレディネスづくりに取り組んだ。また、『伝える力』の基礎・基本となるよう、帯プログラム活動も整備した。

H23～25 研究主題 『気づき』を促す授業の工夫

『伝える力』を伸ばすために、生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方や教師の役割等を捉え直した。生徒が自分の伝えたいことを表現のために、伝達に対する課題や目標に対し「問い」をもつことや課題達成のために「既習事項を活用する力」が必要となる。自ら学習する生徒を育成するためには、「問い」の発見と『気づき』の繰り返しが重要であると実感した。

H26～28 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造 ～振り返りを生かす学習過程の工夫～

『伝える力』を育む授業の創造について、「自分が表現したものを振り返ること」や「よりよい表現を模索すること」の2点から迫った。他者との交流を意図的に仕組み、深く考える授業実践を重ねたことで、①活用できる言語知識の増加、②言語機能に対する意識向上、③相手意識の高揚が成果として挙げられた。「深く考える」授業を繰り返し行っていくことで、生徒は自分の表現したものを深い思考を通して改善しようとするようになり、「振り返り」を生かした学習過程を工夫することが『伝える力』を育む授業を創ることにつながるということが明らかになった。そうした教師が意図的に仕組んだ授業やその学習過程においては、既習知識を基盤として伝達効果を考えながら自己の表現の質を考える等、本校英語科が期待する生徒の姿が見られた。しかし一方で、生徒自らが言語知識を増やそうとしたり、言いたいことと言えことのギャップを感じたときに、もっている知識を活用して伝えようとする姿勢に課題があると考えられた。

H29～R1 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造 ～対話的な学習活動の工夫～

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びを通して『伝える力』を育み、それを見取することを主たるねらいとし、対話的な学習活動を工夫することが効果的に資質・能力を育成することにつながるという仮説のもとに研究を進めた。『伝える力』を育む上で、「見方・考え方」を働かせた深い学びは必要不可欠であり、対話的な学習活動を充実させることが、生徒の深い思考を促し、質の高いアウトプットにつながるということが明らかとなった。指導者が、評価は指導の一環であるという認識をもち、評価を指導計画の中に位置づけて適時組み込むことで、評価を指導に生かすことが可能となり、「指導と評価の一体化」は具現化されることも示された。

◆生徒の実態から

本校には、単語や表現などの知識を豊富にもっており、大きな抵抗を感じることなくまとまった文章を書いたり、質問に対して適切に応じたりする力を備えている生徒が多くいる。また、学習に対して前向きで、授業に真面目に取り組む姿が大半の生徒において見られる。その一方で、「正しい答え」に固執し、失敗や間違えることを恐れ、英語を使って表現することに抵抗を感じている生徒も少なくないと感じられる。自由な発想でものごとを考えたり、自分から積極的に英語を使って情報を発信したりする意欲が低いとも考えられる。外国語教育においてコミュニケーション能力を養うことは目標の中核を成しており、「話すこと」や「書くこと」などの言語活動の充実と技能の育成は現行学習指導要領の課題でもあるため、改善を図る必要があると考える。また、政治や外交、歴史、文化、環境、医療、科学技術など多方面にわたる話題に興味関心を示す生徒が多いが、直面しているまたは直面するであろう課題についてはあまり関心がなく、危機意識も低い。それに伴い、興味関心に基づいて得た多くの知識を活用し、課題を解決する方策等について自ら思いを巡らす姿もあまり見られないと言える。そうした姿は、他者や社会に貢献しようとする意識が低いからであるとも考えられる。以上を踏まえた時、身近で日常的な話題だけでなく社会的な話題も含めて、様々な情報について読んだり聞いたりした上で、課題解決を踏まえた自分の考えや意見、情報等を「伝え合う」学習活動を充実させ、それに主体的に取り組もうとする姿勢を持たせるための仕組みを作ったり、表現できたこととできなかったこと及びその理由について振り返らせる経験を積み重ねたりすることで、自分たちの未来に能動的に関わろうとする姿勢や他者と協働して未来を創っていくために必要とされるコミュニケーション能力が養われていくと考える。

◆『伝える力』の定義について

ここで、本研究主題のキーワードの1つである『伝える力』について、我々にとっての意味を定義しておきたい。新学習指導要領において「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーション」が目標に掲げられており、それを支える資質・能力と『伝える力』は重なる部分が多い。コミュニケーションを実現させる際には、その原動力となる「伝えたい」という意欲や積極性、さらには、目的や方略選択につながる「いつ」「どこで」「誰に」「何を」伝えるのかという意識を持つことは重要であると考えられる。本校英語科は『伝える力』を次の通りに定義し、さらに新学習指導要領のねらいに沿う形で今年度以降の研究を進める。

本校英語科が考える『伝える力』の定義とは、「自分の考えや意見、情報等を、聞き手や読み手に配慮し、自ら進んで、目的や場面、状況に応じて身の丈に合った英語を常に更新させながら用いて、伝え合うことができる力」である。

2 研究の目的

『伝える力』を育むために、対話的な学習活動によって「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びを実現させ、「主体的な学び」を促す学習活動の在り方と評価の方法を明らかにする。

3 研究内容（全体研究との関わり）

令和2年度から全体研究では「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～」という主題を設定し、2年計画で研究を行う。「追究」の過程に必要なとされる「自ら問い続ける力」と「創造性」の2つをキーワードに据え、それらを十分に発揮させるための「主体的な学び」の在り方と評価の方法について研究を深めていく。

本校英語科においては、『伝える力』を育むためには「見方・考え方」を働かせた学びが必要不可欠であるという、これまでの研究成果における認識のもと、昨年度までの研究で明らかとなった生徒の課題でもある、「主体性」に重きを置いた研究を進める。以下、教科研究のキーワードでもある「見方・考え方」、「対話的な学習活動」、「主体性」、「創造性」などの意味に触れながら、全体研究と教科研究の関わりについて述べる。

(1) 英語科における「見方・考え方」について

「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて」（平成28年8月）では、「社

会や世界との関わりの中で、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、外国語を聞いたり読んだりすることを通じて様々な事象等を捉え、多様な人との対話の中で、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現して伝え合うことで思考していくことが重要である。」としており、また、「このような学習過程を通じて、学ぶことの意味や自分の生活、人生や社会の在り方に主体的に結び付けたりする学びが実現されることによって、学校で学ぶ内容が、生きて働く知識や力として育まれることになる。こうした学びの過程が外国語教育の『主体的・対話的で深い学び』であり、その鍵となるものが、教科等の特質に応じた『見方・考え方』であると考えられる。」としている。さらに、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）（以下、「中教審答申」）では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と整理している。本校英語科は、生徒に、以上に述べた外国語科としての「見方・考え方」を働かせた学習活動を積み重ねさせていくことによって『伝える力』を育むことができるという考えのもと、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を次のようにとらえる。

本校英語科が考える「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「生徒が自ら進んで英語で表現し伝え合うため、言語や文化を、自身の経験則や背景知識と照らし合わせながら、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて自分の考えや意見、情報等を形成、整理、再構築すること」である。

我々が育みたい「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の具体的なものとしては、例えば、人物を紹介する活動においては、「相手との関係を踏まえ、紹介する目的に応じて人物の情報等を整理及び取舍選択し、相手の興味関心に応じて話題を膨らませるなどして文章を組み立てること」である。また、議論の活動において育みたい「見方・考え方」とは、「議論すべき話題の背景や現状などを踏まえ、さまざまな立場や捉え方があることを認めつつ、自分の考えを伝え、相手を説得するために、集めた情報を整理しながら、伝えたいことが伝わるように、時には他者の目を借りながら、試行錯誤して自分の意見をまとめていくこと」である。

「教科等の特質に応じた『見方・考え方』」は「主体的・対話的で深い学び」の鍵となっており、中教審答申では、「『主体的・対話的で深い学び』の実現」を「学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」と整理している。また、「深い学び」を「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう」と整理している。以上のことから、本校英語科では、「見方・考え方」を働かせた学びを通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が活用・発揮されて資質・能力が伸ばされたり、新たに育まれたりすることを目指す。

上で述べたように、言語や文化を他者との関わりから捉え、目的・場面・状況等に応じて情報や自分の考えなどを伝え合う言語活動を通して、「コミュニケーションを図る資質・能力」を高める生徒を育成することは、「対話的な学習活動」を通して、『伝える力』を高める生徒を育成することと言い換えることができる。「対話的な学習活動」とは、「学習者」、「他者」、「対象世界」それぞれの間で行われる「対話」を指しており、「学習者」と「他者」、「学習者」と「対象世界」、「他者」と「対象世界」、さらに「学習者」と「学習者自身」とを結びつける授業の場面のすべてを表している。具体的には、課題提示や言語材料の導入場面、教師によるイントロダクションや教師と生徒とのインタラクション、生徒同士の会話ややりとりを含む言語活動、自己評価や他者評価、教師や他の生徒からのフィードバックなど、言語・文化の理解やそれについて自分なりの考えを形成すること、自己内省などが「対話的な学習活動」として挙げられる。言語活動について言えば、教師と生徒または生徒同士の双方向による対話といった「話すこと（やりとり）」だけでなく、聞き手や読み手への相手意識が必要となる「話すこと〔発表〕」、「書くこと」、さらには、言語材料や異文化の理解、まとまりのある英文などの読解を含む「聞くこと」や「読むこと」、5領域に及ぶと考えられる。

(2) 本校英語科における「主体性」について

これまでの研究から、「見方・考え方」を働かせた学びを実現させるための手立てには、生徒の様々な「主体性」を引き出す可能性があることを見出してきた。例えば、目標を確認し授業計画を示して見通しを持たせることで、生徒は自ら進んで活動に取り組み、課題解決に向かうようになる。また、生徒の既有知識を経験則や背景知識と照らし合わせて考えさせる教師の発問づくりによって、生徒は知的好奇心や知的欲求を原動力として未知なるものごとに意味づけをしながら学びを進める。さらに、単元を貫く問いを設定することで、生徒は社会や世界、他者と自分との関わりについて考えるようになる。また、パフォーマンス課題において目的、場面、状況を設定することで、生徒は相手意識を持って表現活動に取り組むようになる。以上のように、本校英語科では、学習に臨む姿勢や表現活動において「何を」「誰に」「どのように」伝えるか等について考えを巡らせる生徒の様子に「主体性」を見出すこととする。具体的には、「興味や関心を持って学習に取り組み、目的や目標の実現に向けて、振り返りなどを通して自己調整をしながら、粘り強く課題に取り組む姿」を「主体性」を持って学ぶ生徒の姿と捉える。

これまで、学習に前向きに取り組む姿勢を「主体性」と述べてきたが、さらに本校英語科では、「何を」伝えるかといったメッセージの部分にも「主体性」を見出したいと考える。新学習指導要領では、「社会における様々な場面で活用できる概念」として学習内容を理解したり、「変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能」を身に付けたりし、「簡単な情報や考えなどを理解したり、理解したことを活用して表現したり伝えあったりする」ことを求めている。また、「様々な人々との対話の中で、目的や場面、状況等に応じて、既習のものも含めて習得した概念（知識）を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見出して解決策を考えたり、身につけた思考力を発揮させたりすること」が重要だということも示している。まとまりのある英文や生身の人間から得た情報をもとに、自分の意見や考えなどをもち、地域課題や身近な生活上の課題を解決するための最適解を見いだして、相手に伝えるまたは発信する行為に「主体性」は現れてくると考える。この際、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」が発揮され、既有の知識を繋ぎ合わせて地域（あるいは社会の）課題や身近な生活上の課題を自分なりに解決し、自他の人生や生活を豊かなものとしていく工夫がなされていくことが期待される。これこそ、本校英語科が生徒に育みたい「創造性」であり、『伝える力』の育成には欠かせない要素になってくるであろうと考える。

4 研究仮説

「対話的な学習活動」を積み重ねていく過程において、「主体性」を促す指導とその評価を工夫することによって、「主体的な学び」が実現し、効果的に『伝える力』を育むことができるだろうと考える。

5 研究を支える取り組みとして

○全体研究で示す「主体的な学びのプロセスモデル」を意識した単元計画及び授業実践

本校全体研究において、「主体的な学び」とは、生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿であると捉えている。これは、新学習指導要領で示されている「主体的に学習に取り組む態度」とほぼ重なる。本校英語科の昨年度までの研究においても、『伝える力』を効果的に育むためには「主体的な学び」が必要であることが確認されており、本校生徒のさらに充実させるべき課題の1つでもある。単元などの学習に見通しを持ち、形成的評価や方略調整を重ねながら、自らの学びの振り返りを行うプロセスを、学習者である生徒に経験させることを通して、「主体的な学び」の実現に迫りたい。また、指導者である教師自身が、そうしたプロセスを意識して単元をバックワードデザインし、効果的にかつ効率的に生徒の資質・能力を育成したいと考える。

○「主体性」を評価するためのワークシート開発

本校英語科では、「主体性」を持って学ぶ生徒の姿を、「興味や関心を持って学習に取り組み、目的や目標の実現に向けて、振り返りなどを通して自己調整をしながら、粘り強く課題に取り組む姿」と捉えていることを先に述べた。そうした姿は、目に見える部分とそうでない部分があると考えられる。例えば、パフォーマンス課題に臨む際、粘り強く努力する様子や自身の目標に対するズレを修正しようとする様子は、生徒の学習に取り組む姿から見とることが可能であるように思われる。一方で、学

習内容やトピックに興味関心を持っているかどうか、言語活動を楽しんで取り組んでいるかどうかについては、外見では判断しづらい。そこで、生徒の「主体性」を正しく評価するためには、生徒の内面を言語化させ、可視化する工夫が求められる。学習調整や粘り強さについても同様である。全ての授業で、全ての生徒の「主体性」を把握することは現実的ではなく、パフォーマンス課題に取り組む様子から評価するのでは不十分であるとも言える。そのため、授業ごとに自己評価に取り組みせ、言語化された「主体性」を蓄積していくことで、パフォーマンス課題の成果とともに「主体性」を適切に評価することができるようになると思う。

○「創造性」を発揮させるための学習活動の工夫

本校英語科が生徒に身につけさせたい『伝える力』には、「誰に」「どのように」伝えるかといった相手意識や配慮が重要であると同時に、「何を」伝えるかという内容も重要であることは前述した。情報化やグローバル化が飛躍的に進む未来を生きる生徒たちには、人間ならではの感性を働かせてより豊かな社会や人生を創っていくことが求められている。彼らが直面する社会の課題や問題点等を自分ごととして捉え、自分なりの考えや解決策を持った上で、相手に伝えたり発信したりする経験を重ねていくことによって、多様な人々と協働しながら新たな価値を創っていく「創造性」が育まれていくと考える。まず、生徒たちには身近な生活上の問題や課題に目を向けさせ、よりよい人間関係づくりや円滑なコミュニケーションの取り方などを学ばせたい。さらに、教科書等で取り上げられている社会的な話題について、文章や情報等の正確な読み解きを通じて、自分なりの考えや意見を持って表現活動に取り組ませる。その際、単元を通して考えを深めさせたいトピックなどに関する「単元を貫く問い」を設定したり、教科書以外の資料を提示するなどして、興味を持たせたり多角的なものの見方に触れさせたりしたい。そうすることによって、伝える内容に幅が生まれ、実際の生活や直面するであろう未来に関連したより具体的でリアルな情報の発信が促されると期待される。そこには「創造性」が発揮されるだけでなく、「主体性」も育まれていくだろうと考える。

6 指導の実際

■ 令和3年度事前研究会 授業指導案（第1学年）※令和3年度中等教育研究会において、英語科は、日頃の授業の様子を本校ホームページにて公開とし、公開授業は未実施。

※2, 3については紙面の都合上割愛いたします。

1. 単元名 Unit3 Club Activities (New Horizon English Course 1 (東京書籍))

4. 単元の指導について

(1) 全体研究との関わり（「主体的な学び」のプロセスモデル実現のための手立てについて）

①本単元における「主体的な学び」の姿

本単元において、主たる目標は「話すこと（やりとり）」である。疑問詞を用いた文を使えるようになることで、相手の様々な情報を引き出すことが可能となる。「会話」を学習活動として取り上げ、一定時間、会話を継続させることを目標とすることで、生徒の疑問詞の使用を促したい。目標達成のために「何を」相手に聞か、「どのような」英語を使って相手に質問するか等と思いを巡らせる姿が見られることを期待する。そうした姿を本単元における「主体的な学び」の姿とする。

②本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価

本単元では、パフォーマンス課題に向けて「スモールトーク」を帯活動として扱う。毎回の授業で、「スモールトーク」に2回取り組ませるが、1回目の取り組みが終わったところでフィードバックを意図的に仕組む。これは、生徒の発話をヒントに表現の幅を広げたり、会話が円滑に進まない生徒に手立てを講じたりするためである。仲間の発話や教師から与えられた表現を使って、毎回のパフォーマンスを向上させることを狙う。このサイクルは、全体研究で言うところの「遂行」「振り返り」「方略調整」にあたる。生徒はこうした学習のサイクルを経験し、パフォーマンス課題達成のための資質・能力を身につけていくと期待する。そして、2回目の「スモールトーク」を終えたところで、生徒たちには「振り返りシート」への記入をさせる。振り返りの視点を与え、自らのパフォーマンスの改善点を見つけさせたい。課題達成に向けて、何ができているのか、何が足りていないのか等について客観的に自分自身を見つめさせることで、「学習の調整」を促したい。また、記録の蓄積をすることで、課題達成までの過程を「見える化」し、どのように学習を積み重ねてき

たのかということ指導者だけでなく学習者にも把握できるようにする。

(2) 教科研究との関わり（『伝える力』を育むための主体性を促す対話的な学習活動の工夫について）

① 「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意識した単元計画及び授業実践

生徒の主体的な学びを促すため、本単元においてもプロセスモデルを意図的に、計画に組み込む。また、一単位時間内においても、「帯活動」でプロセスモデルを意識した授業を展開する。特に、「遂行」後の「振り返り」によって、自己内省を促し、時には他者との交流を経て「方略調整」を行わせたい。具体的には、スモールトークの実践を通して、自身の課題を把握し、教師や他の生徒とのやりとりを通して解決の糸口を見出し、再度、スモールトークを実践するということである。こうしたプロセスを経験することで、課題解決のための見通しをもつことができるようになり、未知の問題にも自ら進んで取り組んでいけるようになると考える。

② 「主体性」を評価するためのワークシート開発

前述の「主体的に学習に取り組む態度」の評価と同様

③ 「創造性」を発揮させるための学習活動の工夫

多様な人々と協働しながら新たな価値を創る「創造性」を育むために、本単元においても、よりよい人間関係づくりや円滑なコミュニケーションの取り方などを学ばせたい。対話においては、相手意識や配慮が大切であるという意識を持たせるだけでなく、相手の発言を促したり、情報を引き出したりする方法について、実際の会話を通して見出せるように授業を展開する。

5. 単元の目標

日常的な話題について、疑問詞を適切に用いて相手に質問したり簡単な語句や文を用いてそれに答えたりして、相手のことをよりよく知ったり自分のことをより詳しく伝えたりすることができる。

山梨大学教育学部附属中学校版 CAN-DO リスト（新学習指導要領対応）との関連

	話すこと（やりとり）
1年生	○自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができる。

6. 単元の評価および指導計画

(1) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<知識> ①疑問詞 where や when, I want to ..., How many ...?を用いた文の形・意味・用法を理解している。 <技能> ②学校生活や部活動について、疑問詞 where や when, I want to ..., How many ...?などを用いて、場所や時間などの詳細な情報を即興で伝え合う技能を身につけている。	日常的话题についてお互いのことをよりよく知るために、学校生活や部活動について、簡単な語句や文を用いて場所や時間などの詳細な情報を即興で伝え合っている。	日常的话题についてお互いのことをよりよく知るために、学校生活や部活動について、簡単な語句や文を用いて場所や時間などの詳細な情報を即興で伝え合おうとしている。

※各観点の名称については、記述の便宜上、以下のようにする。

知識・技能：ア 思考・判断・表現：イ 主体的に学習に取り組む態度：ウ

(2) 評価方法

①スモールトークにおける振り返りシート(Google Workspace 上での Google Spreadsheet の活用)

・単元の途中に行うスモールトークの振り返りをさせることにより、パフォーマンス課題に向けて「粘り強く」学習に取り組む姿勢や「自己調整」している様子を指導者だけでなく学習者本人も把握できるようにする。クラウド上のサービスを活用し、振り返りシートをデジタル化することによって生徒教師間のやり取りを簡略化させ、提出状況を容易に確認できるようにした。また、教師から適

宜コメントを返すことにより、振り返りの観点を学習者に気づかせたり振り返りの精度を高めたりすることが可能となる。さらに、他者の振り返りを共有することで、様々な振り返りの視点の気づきを促すことができると考える。

②ルーブリックを用いたパフォーマンス評価

・パフォーマンス課題を評価するための規準として、パフォーマンスの正確さ及び適切さについてルーブリックで示すことにより、単元の学習を通して「何ができるようになる」のかということについて、また、課題をクリアするためには「何を意識して学習活動に取り組めばよい」のかということについて指導者だけでなく学習者にも把握できるようにする。さらに、パフォーマンス評価をすることによって、単元の学びを通して身に付けた資質・能力を見取ることができると考える。

(3) 指導計画 (全 10 時間)

時間	○ねらい ・学習活動	評価規準	主体的な学びのプロセスモデル	評価方法
1	○疑問詞 where の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・疑問詞 where を用いたコミュニケーション活動	ア① ア②		活動の観察 振り返りスプレッドシート Google Classroom
2	○疑問詞 when の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・疑問詞 when を用いたコミュニケーション活動 ・Unit3 part1 の本文内容理解	ア① ア②		
3 本時	○既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。 ・Unit3 part1 の本文をアレンジし、オリジナルスキットを作成する。	イ	遂行	
4	○want to ...の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・want to ...を用いたコミュニケーション活動 ・Unit3 part2 の本文内容理解	ア① ア②		
5	○既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。 ・Unit3 part2 の本文をアレンジし、オリジナルスキットを作成する。	イ	振り返り	
6	○How many ...?の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・How many ...?を用いたコミュニケーション活動 ・Unit3 part3 の本文内容理解	ア① ア②		
7	○既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。 ・Unit3 part3 の本文をアレンジし、オリジナルスキットを作成する。	イ	遂行 振り返り	
8	○場面や状況に合わせて、適切なオリジナルスキットを書くことができる。 ・ペアで協力して、オリジナルスキットを作成する。	イ ウ	方略計画 遂行	活動の観察 オリジナルスキット
9	○場面や状況に合わせて、適切なオリジナルスキットを書くことができる。 ・ペアで協力して、オリジナルスキットを作成する。	イ ウ	振り返り 方略調整	
10	○聞き手を意識して、オリジナルスキットを適切に音読することができる。 ・ペアで作成したオリジナルスキットを発表し合う。	イ ウ	遂行	

後日	○適切な語句や文を用いて、相手のことをよりよく知ったり自分のことを詳しく伝えたりすることができる。 ・生徒同士またはALTとスモールトークを行う。	イ ウ	全体の振り返り	パフォーマンステスト
----	--	--------	---------	------------

オリジナルスキットについて

(1) 内容

ペアで協力し、提示された場面に合うように、2人の対話文を書く。

(2) 課題

次のようなあらすじになるように、最初と最後の文に繋がるような2人の会話を考え、対話文を作りなさい。
「友人2人が食事に行く話をしています。お互いの食べたいものを話し、駅の近くにあるレストランに行くことに決めました。」
(最初の文) It's almost noon.

(最後の文) Let's go!

(3) 評価の基準 (ルーブリック)

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りがなく正しく疑問詞を用いた文が書かれている。	好きな食べ物について話され、自然な流れになるような対話文が書かれている。	課題に取り組む様子を観察し、個人内評価として扱う
b	誤りがあるが、コミュニケーションに支障のない程度で疑問詞を用いた文が書かれている。	自然な流れではないが、好きな食べ物について話されている対話文が書かれている。	
c	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	

パフォーマンステストについて

(1) 内容

生徒同士またはALTとのスモールトークを行い、相手の好きな食べ物やお気に入りのレストランなどについて即興で伝え合う。

(2) 課題

友達またはALTと「好きな食べ物」について話しなさい。自分も相手も共通して好きな食べ物があった場合は、一緒に食事に行く約束をしなさい。

(3) 評価の基準 (ルーブリック)

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りがなく正しく疑問詞を用いて質問したり、食べたいものや行きたい場所について伝えたりしている。	自分の好きな食べ物について話し、相手の好きな食べ物について情報を引き出している。	自分の好きな食べ物について話し、相手の好きな食べ物について情報を引き出そうとしている。
b	誤りがあるが、コミュニケーションに支障のない程度で疑問詞を用いた文を用いて質問したり、食べたいものや行きたい場所について伝えたりしている。	相手の好きな食べ物について情報を引き出していないが、自分の好きな食べ物について話している。	相手の好きな食べ物について情報を引き出そうとしていないが、自分の好きな食べ物について話そうとしている。
c	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない

7. 本時の授業について

- (1) 日時： 令和3年6月15日（火）
- (2) 授業学級：第1学年3組
- (3) 場所： 第1学年3組教室
- (4) 本時のねらい： 既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。
- (5) 展開

過程	学習活動	教師による支援	主体的な学びのプロセスモデル
挨拶 (2)	あいさつをする 教師と簡単な会話をする	英語を話す雰囲気づくりをする 生徒と簡単な対話をする	
導入 (3)	本時の学習活動を確認する スモールトークの目標を確認する	スモールトークのトピックを提示する 目標を確認する ・ペアで1分30秒間、会話を継続させる ・相手から多くの情報を引き出す	【目標設定】
活動① (15)	スモールトーク（1回目）に取り組む	計時（1分30秒）をする 机間指導を行いながら、生徒が使っている表現やメジャーエラーを把握する	【遂行】
	目標を達成できたかどうかを振り返る	スモールトーク内で用いた表現について確認をする	【振り返り】
	スモールトークの中で使った表現を確認する	会話を継続させるためのポイントを確認する	【方略調整】
	スモールトーク（2回目）に取り組む	計時（1分30秒）をする 机間指導を行いながら、生徒が使っている表現やメジャーエラーを把握する	【遂行】
活動② (25)	振り返りを行う <Google Classroom>（ICTの活用）	情報端末の操作が円滑に行えていない生徒のサポートをする	【振り返り】
	本時の活動を把握する	本時の活動について説明する	
活動② (25)	4人グループで協力して、Unit3 part1 本文に6文を追加して、オリジナルスキットを作る		
	Jamboardを活用し、4人グループでオリジナルスキットを作成する <Google Classroom>（ICTの活用）	情報端末の操作が円滑に行えていない生徒（グループ）のサポートをする	【遂行】
まとめ (5)	完成したオリジナルスキットを提出する	課題の提出方法について確認する 課題が終わっていないグループは、家庭学習で取り組むように伝える	

【 】内の記述は、本校の全体研究における「主体的な学びのプロセスモデル」

8. 研究授業（本単元）のまとめ

今年度の英語科では、「対話的な学習活動」を積み重ねていく過程において、「主体性」を促す指導とその評価を工夫することによって、「主体的な学び」が実現し、効果的に『伝える力』を育むことができるだろうと考え研究を進めてきた。本単元においては、スモールトークを帯活動として授業の冒頭に位置付け、対話的な学習活動として生徒たちに取り組みさせた。毎回のスモールトークの授業展開では、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意図的に組み込み、「遂行」した後に、「振り返り」をさせ、「方略調整」をした上で再度「遂行」させるという流れを生徒たちに経験させることで、生徒の「主体的な学び」を実現させることをねらった。また、生徒たちのスモールトークに取り組む姿（エンゲージメント）から、単元末に実施されるパフォーマンス課題を達成するために粘り強く学習する力を見取るとともに、振り返りシートの記述などから生徒が自らの学習を調整する力を指導者が把握できるようにすることも主たるねらいとした。以下に、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意識した単元計画及び授業展開と「主体性」の評価について、本単元の授業実践を通して考察した内容を記述する。

『主体的な学び』のプロセスモデルには、主に「目標設定・方略計画」「遂行」「振り返り」「方略調整」「全体の振り返り」があることは前に触れた。英語科の授業においては、特に新出の言語材料を使用することによって身につけていく授業展開が言語習得の過程と合致しており、有効に働くと考えられる。このプロセスモデルは、生徒の主体的な学びを実現させるための過程であるが、同時に言語習得を円滑に進めるための過程でもあることが明らかとなった。それぞれのフェーズにおいて、特筆すべきことを挙げる。

①「目標設定・方略計画」

生徒がそれぞれの単元または複数の単元で身につけた資質・能力を見とるため、英語科では単元末または複数単元末にパフォーマンス課題を生徒に課す。生徒は新たに学んだ言語材料や新出語句、連語表現などを駆使しながら、目的・場面・状況に適した英語を選択・使用し、表現活動に取り組むわけだが、本単元でも行ったように、単元の学習に入る段階で、ゴールとなるタスクに必要な表現を具体的にイメージさせたり、モデルとなる教師のパフォーマンスに触れたりすることで、生徒はある程度の見通しを持って学習に取り組むことができるようになる。見通しを持つことによって、生徒は身につけるべき知識及び技能を把握した上で学習に取り組むことができ、膨大な量の単語や表現の中からパフォーマンスに必要なものを取捨選択し、自らの判断で重点的に反復練習を行う。目標とするパフォーマンスとそれを実現させるための学習プロセスが有機的に結びつき、生徒は、ゴールに向かって自分自身を自覚しながら学習を進めることができ、主体的な学びを実現させることができた。

単元の学習のゴールをイメージし、目標設定をする際、理想とするパフォーマンスを把握することに加え、それを達成するための道筋を把握することも重要である。この方略計画を生徒自らが設計できるようになることが、授業を離れた場面でも学びを続けていく、生涯学習に最も重要になる要素であると考えられる。これは本校英語科の目指すところの一つでもある。効果的な方略計画を立てるためには、次の3点について生徒に具体的に考えさせる指導が必要となる。1つ目は、言語面である。これは、パフォーマンスにおいて、「どういう英語を使おうか」と、どのような言語を使って表現するかということについて考えることであり、前述した理想とするパフォーマンス像をイメージすることと重なる。2つ目は、内容面である。これについては、単元のスタートの段階で築くものではなく、学習を深めていく最中に築かれていくものである。単元の学習で様々な価値観や情報に触れ、思考を重ねる過程で、単元の学習を始める前と少なからず変化していく想いや考えを英語というツールを用いて生徒たちは表現していくのである。この「何を表現するか」という内容面について考える指導は非常に重要であり、単元を通して指導者は意識しなければならない点でもある。3つ目は、表現方法である。単元の学習を通じて抱いた想いや考えを伝える際、適切な語彙や表現を選択し、使用する必要がある。授業者は、学習者にこれらを身につけさせるために反復練習や表現活動を繰り返し、言語材料の定着を図る。単元の学習を通して、目的・場面・状況に合わせて、生徒が自らの判断で適切な言語材料を適切に使用できるようにするために、指導方法を常に改良していかなければならない。

目標設定・方略計画をさせる段階で、指導者が意識しなければならないことの1つに、教師の身につけさせたい力と生徒が自ら身につけたいと思う力に不一致はないかどうか、ということが挙げられる。本研究で生徒の主体性を促すことを意図する上で、生徒の学習は、教師の押し付けになってはいけない。生徒の自主的な学びにつなげるためのトレーニングとして、教師主導の学習のプロセスの経験を積ませるこ

とは必要不可欠ではあるが、生徒自らが学びたいと思う意志を後押しできる目標設定を心がけたい。本単元においては、「なぜ会話を継続させるのか?」「適切なあいづちはなぜ必要なのか?」「相手から情報を引き出すことはなぜ大切なのか?」について、指導者が明確な答えを持っていること、生徒に伝えられること、生徒が納得できること、単元の学習(時には単元の学習を越えて)で常に意識させる指導を継続させることが「主体的な学び」に繋がるのではないかと考える。

②「遂行」

これまでの英語科における学習指導では、母語による解説等を通じて新出の言語材料の構造等を十分に理解した上で、ドリル練習を経験し、自信をもって言語活動に取り組むというプロセスが主であるとされてきた。しかしながら、この流れは言語習得のプロセスと異なる部分が多く、短い学習時間で規則性を見出し、より多くの文法事項を理解しようとする、効率を重視した学習方法であった。ただし、理解することにおいては効率的ではあるものの、英語を使うことができない生徒が多く輩出されてしまうということが課題として残されてしまった。こうした学習プロセスを改善し、本校英語科では、「『主体的な学び』のプロセスモデル」と同様の言語活動の流れを実践してきた。特に、スモールトークの展開では、教師のオーラルイントロダクションや生徒とのインタラクションを通じて提示された言語材料を使って、「なんとなく」理解した状態でクラスメイトと話す「遂行」から、自らの発話や会話の内容を「振り返り」、うまくいった部分とそうでなかった部分を個人、または学級全体で確認し、改善方法や手段を獲得する「方略調整」を経て、再度クラスメイトと会話をする「遂行」を繰り返すという流れを意識した。生徒の学習に取り組む様子から、1度目よりも2度目の方が発話の質が向上したり、発声のボリュームが上がったりすることが認められた。また、1単位時間の中だけでなく、複数の授業で繰り返すことにより、自ら言葉を発しようとする積極的に会話をしようとする姿勢や指定された時間以上に会話を継続させようとする姿も見られるようになった。周囲の生徒の様子を気にしながら会話をしていた生徒が、相手の生徒に集中して表情豊かに会話をしている姿を見ることができたことも大きな成果であると感じる。何人かの生徒の振り返りの記述には、「話すことに慣れてくると、(会話の)時間が短く感じるようになった」といった内容が見られた。繰り返しの言語活動が生徒のパフォーマンスの質を向上させ、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を踏むことで、自ら進んで話すことに取り組む生徒の様子が見られるようになった。このように、生徒の「主体性」は、生徒のパフォーマンスに取り組む姿の見取りで行われる部分が多い。ただし、パフォーマンス課題には表出しづらい生徒の粘り強さや自己調整力を見とることも忘れてはならない。特に音声でのパフォーマンスは時とともに流れてしまうものであるから、一人の教師が30名以上もの生徒の様子を把握することは不可能である。そのため、ICT機器等を活用し、録音や録画の機能を活用して授業後に評価したり、課題に取り組んだ際の自己評価等を、数値化された尺度の達成度だけでなくCan-Doリストに見られるような行動指標で「できること」「できないこと」などについて言語化して振り返らせたりするなどの工夫が必要である。パフォーマンス課題からは見取れなかった生徒の主体性を、振り返りの記述から見取る方法は、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」に示されている通りである。

③「振り返り」・「方略調整」

自身の学習の成果を振り返り、目標に対してどの程度近づいているのか等について内省させることで、次の言語活動や次時の授業での目標を持ったりするといった自己調整を促すことが主なねらいであるが、多くの生徒が本時や本時の言語活動にのみ振り返っており、単元の目標について振り返りができていないことが認められた。そのことにより、毎回の振り返りが、振り返ることで終わってしまい、単元末のパフォーマンスに向けた振り返りとはなり得なかった。つまり、生徒たちは振り返ること自身に意識が集中し、振り返りを活かして単元末の理想とするパフォーマンス実現を目指そうとすることに意識が向かなかった。これには、振り返りをする際の具体的な観点を生徒に示すことが欠けていたことが原因として考えられる。例えば、言語表現に関わって、「今回のパフォーマンスではどのような表現を使ったのか」について具体的に記述させたり、「単元末のパフォーマンスで使えそうな表現はあったか」どうかについて振り返らせたりすることが考えられる。そうした振り返りを書き溜めていくことにより、単元末のパフォーマンスで振り返りが活かされるはずである。他にも、振り返りの具体的な観点として、機能面での振り返りも考えられる。スモールトークにおいては、今回は継続させることを目標の1つとしたが、「会話を盛り上げるために意識したこと」や「用いた繋ぎ言葉」、「会話が止まってしまうブレイクダウンがあったかどうか」や「それを防ぐために工夫したこと」などを記述させることで、次のパフォーマンスで意識することが明確になるだろう。さらに、それらを共有することで個人の振り返りが学級全体の財産となり、そ

それぞれのスモールトークの質は向上していくことが予測される。自己調整のために振り返りを活用させるためには、こうした具体的な振り返りの観点を生徒に示すことが重要であると考えられる。

以上のように、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意図的に授業展開に位置付けて授業を行うことで、生徒の主体性を促す授業実践は可能となることが明らかとなった。ただし、このプロセスモデルを指導者だけでなく、学習者である生徒自身も意識できていたかどうかと問われると、疑わしい。生徒の主体的な学習は授業の中だけでなく、他教科においても、3年間を通じて、もっと言えば生涯に渡って行われることが期待される。生徒自身がこのプロセスの有用性を認識し、自ら生かそうとする姿勢が見られるようになることが、英語科だけでなく本校全体として目指していくべきことであると考えられる。そのためには、このプロセスを自分のものにするまで、繰り返し経験させ、継続して指導にあたっていく必要があるだろう。

生徒の主体的な学習を促す授業の実現のためには、上記のプロセスモデルだけでなく、ICT機器の活用も欠かせない。政府が進めるGIGAスクール構想の実現化に伴い、整備された一人一端末を活用することにより、生徒の主体的な学びを促進することができる大きな可能性を感じる。例えば、生徒同士の共同編集や成果物の共有などが容易になされ、時間や空間を越えて実現可能となる。日本と外国を繋いでの学習や過去の先輩たちの音声や映像に触れることだって可能である。それらは生徒にとっての良きモデルとなり、英語学習における大きなモチベーションともなり得る。また、これまで自己表現が苦手であった生徒にとっては、文字や映像で自身の英語を使って発信することができるようになることは大きな助けとなる。目立つ生徒によって進められていた授業が、全ての生徒にスポットライトを当てた授業に変革することもできる。これは、授業を進める教師の意識の変容にもつながり、生徒主体の授業展開がなされていく契機にもなるだろうと考える。

一方で、懸念されることもある。例えば、翻訳ソフトやスペルチェック機能などを活用した弊害として、身の丈に合わない英語を使用する生徒が出てしまうことや、生徒の成果物から言語の正確性を見取ることが難しくなってしまうことなどが挙げられる。これら対処としては、情報端末を用いた言語活動と情報端末を持たない言語活動を併用し、再現性を問う場面を設定することなどが考えられるが、指導者の意識改革が求められている部分なのかもしれない。端末を効果的に活用し、個別最適化された学びを実現させるために、指導書の資質・向上が問われている時代となることは間違いない。

7 研究のまとめ

今年度の研究は、2か年の研究のまとめとして意義深いものとなった。学習者、他者、対象世界をつなぐ「対話的な学習活動」を充実させ、教師の適切なフィードバックや「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意図的に単元計画や一単位時間内に位置付けて授業実践することにより、生徒の「主体性」を促す指導が可能となり、「主体的な学び」が実現することが明らかとなった。また、ICT端末の活用により、学習指導の幅が広がり、多様化する生徒のニーズに応える授業実現の可能性にも触れることができた。予測困難な時代に生きる生徒たちに、未知なるものに対応できる力を身につけさせるためにも、自ら課題を発見し、自ら考え、自ら解決する経験を積ませる必要性を強く感じる。そうした意味でも「主体的な学び」は重要で、欠かせないものであるということを、本研究を通じて、改めて認識することができたことは大きな成果である。

今後、AIの発展に伴い、私たち人間には、より「人間らしさ」が求められるようになると言われる。規則や法則に従って判断するのではなく、コンテキストを理解し、相手の立場や個性を尊重し、場面や状況に合わせて適切に判断し、行動を起こせる人間らしさである。そうした「人間らしさ」を発揮するための「力」は人間関係の中でしか学ぶことができないものであり、AIは苦手とするものである。人間の強みを最大限に発揮し、豊かに生きる子どもたちの時代を創り上げるためにも、私たち教師は授業や教科の本質を見失うことなく、授業実践を積み重ねていかなければならない。

8 参考文献

- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年）
- 文部科学省 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年）
- 文部科学省 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（平成26年）
- 文部科学省教育課程企画特別部会 論点整理（平成27年）
- 文部科学省教育課程部会 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（平成28年）
- 文部科学省教育課程部会 外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年）
- 文部科学省中央教育審議会 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年）
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要（平成23～27年度）
- 山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要（平成28年度～令和元年度）
- 田中博之 「アクティブ・ラーニングの学習評価」（2017，学陽書房）
- 管 正隆「中学校教育課程実践講座 外国語」（2017，ぎょうせい）
- 文部科学省教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）（平成31年）
- 文部科学省 Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～（平成30年）
- OECD THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS Education2030（2018）
- 国立教育政策研究所 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（令和2年）